

要 旨

内藤鳴雪研究

——子規と歩んだ俳句活動——

黒川 悦子

内藤鳴雪は弘化4年(1847)4月15日、現在の東京都港区三田1丁目の江戸松山藩邸中屋敷に生まれた。前年に父が江戸藩邸に住む常府を命ぜられ、松山から江戸へ引越したため江戸で生れたのである。このことから分かるように、鳴雪は松山の名家の生まれともいえる。

鳴雪が本格的に俳句を始めるようになったのは明治25年、45歳のときである。これは、常盤会寄宿舎の監督をしていた鳴雪が、舎生の正岡子規に俳句の指導を受けるようになったのが契機となっている。鳴雪はこれまで子規の漢詩の師であったのだが、俳句では反対に弟子となったのである。鳴雪は子規よりも20歳年長であるが偉ぶることもなく、また、高浜虚子や河東碧梧桐ともお互いに俳句仲間として接していたようだ。鳴雪の為人のわかるエピソードである。鳴雪は大正15年2月、80歳で没するが、その人生は常に俳句と共にあったと言っても過言ではない。

本研究の目的は、子規とともに歩んだ鳴雪の俳句活動を通して子規の俳句革新運動を新たな視点で捉えなおしてゆくことである。何故なら、これまで子規の俳句革新運動の担い手として高浜虚子と河東碧梧桐が注目されることが多かったからである。

鳴雪の生涯を子規との係わりから大きく3部にかけて考察する。

第1部は、明治29年頃までとし、鳴雪が常盤会寄宿舎の監督をしながら子規と俳句活動をした時代である。この時代は鳴雪が『猿蓑』から客観句を学んだこと、『蕪村句集』入手のため奔走したこと、あるいは、新聞「小日本」の編集責任者となった子規が鳴雪と吟行や議論をしたことを通して子規が俳句革新運動を進める理論を獲得したこと、日清戦争に従軍した子規が帰路の船中で咯血して療養したこと、などがある。これらについて考察する。

第2部は、明治30年1月15日に柳原極堂が松山で俳誌「ほとゝぎす」を創刊したことから、翌年10月10日に虚子が「ほとゝぎす」を引き継いで東京で発行するようになったことに関連した鳴雪の俳句活動について検討する。加えて、明治31年1月から始めた「蕪村句集講義」について考察する。

第3部は、子規没後の鳴雪の俳句活動である。

子規生存中からではあるが、鳴雪は青年向け投書雑誌「文庫」の俳句欄の選者をつとめ、俳論を掲載してきた。「文庫」廃刊後は俳誌「南柯」の創刊に係わり、「南柯」に俳句や俳論を毎月掲載していった。本章はこれら3つの俳句雑誌を中心に鳴雪の俳句活動を検討し、鳴雪の活動の背後にある意味を考える。

次に各部の主な事項について述べる。

第1部では、鳴雪と凡兆について『猿蓑』を視座にして論じてゆく。明治25年に鳴雪が『猿蓑』を読んで凡兆の句から写生を学んだということは従来から指摘があり、また、「近代における凡兆の評価は内藤鳴雪に始まる」という論述も見られるが、具体的に鳴雪の凡兆評価やその影響について論じたものは少ない。そこで、これまであまり論じられてこなかった鳴雪と凡兆について考察する。そして、埋もれがちな鳴雪の功績を契機として広がった明治時代の『猿蓑』及び凡兆の受容について考えていく。

鳴雪が凡兆の「純客観句」に注目し始めたのは明治25年秋から冬にかけてのことと思われる。しかし子規は、「25年頃は、猿蓑の寂にかぶれて居つて他を知らなつた」（「瀨祭書屋俳句帖抄上巻を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ」明治35年2月10日「ホトトギス」）と当時のことを述懐し、鳴雪とは全く違う対応をしている。これは、次で論じる蕪村とも関連があると思われる。

鳴雪は明治俳壇が蕪村ブームに沸く中にあって、『猿蓑』とりわけ凡兆の研究と顕彰に力を注いでいく稀有な存在といえる。明治時代の『猿蓑』の注釈書も視野にしながら、鳴雪にとっての『猿蓑』を解明してゆく。

また、鳴雪は明治時代になって翻訳された新しい哲学・心理学用語である客観・主観の概念を凡兆句によって示していることにも注目し、この後、虚子が唱える「客観写生」にも大きな影響を与えたことが推察できることを指摘する。

続いて、鳴雪と蕪村について論じる。

明治26年頃、子規たちが当時入手困難だった『蕪村句集』を懸賞付きで探索し、

さかんに蕪村を賞揚して「蕪村派」と呼称された、ということはよく知られている。この蕪村ブームの渦中に鳴雪は身を置いたのである。鳴雪が『蕪村句集』を2円で購入したことも話題の一つである。また、あまり知られていないが、鳴雪は松山の村上霽月と書簡のやり取りをして盛んに蕪村を論じていることなどが注目される。蕪村は当時の芭蕉崇拜者の旧派宗匠に提示された子規の俳句革新運動の旗印ともいえる俳人である。鳴雪と蕪村について考察することは重要と考える。

第2部は、俳誌「ホトトギス」における鳴雪の存在について考察する、

「ほとゝぎす」は柳原極堂が松山で明治30年1月15日に創刊した。この創刊に際してもっとも喜んだのが鳴雪であったと、子規は書簡に記している。この一事からしても、鳴雪が「ほとゝぎす」発行に協力的であったことは容易に推察できるが、具体的に検討してゆく。また、「ほとゝぎす」創刊の契機に大きく関係しているのは次のことだと思われる。子規は日清戦争従軍の帰路に咯血し、療養を兼ねて松山中学で教師をしていた漱石の「愚陀仏庵」へ寄寓した。そこへ、極堂等「松風会」会員が俳句指導を求めて熱心に通ったことである。なお、子規留守中の新聞「日本」俳句欄掲載句の最終チェックは鳴雪が行っており、子規からの信頼の厚さがわかる。

ところで、松山からの発行は20号で終わり、明治31年10月10日からは後を引き継いだ虚子が東京から発行する。虚子が東京で「ホトトギス」を発行するようになると、鳴雪と子規、子規と虚子、の関係が自ずと変化する。その変化を調査しながら鳴雪の俳句活動を検討する。

続いて、明治31年1月から鳴雪、子規、虚子、碧梧桐らを中心に毎月おこなわれた「蕪村句集講義」について検討する。この講義は、『蕪村句集』（テキストは松窓乙二注釈『増訂蕪翁句集』）を一句ずつもれなく輪講・合評し、子規の没後も全句が終了するまで続けていかれた。また、その「講義」の記録は順次「ホトトギス」誌上に掲載され、なお且つ、それぞれの季節の句が終了する度に単行本として刊行されていたのである。

20歳まで江戸時代を過ごした鳴雪は、明治時代に育った子規たちとは違い、より蕪村に近い時代感覚で発言していることは注目すべき点である。鳴雪と子規の評価の違いをいくつか挙げると、次の通りである。

- ①鳴雪は王朝時代に、子規は明治時代に当てはめて連想する傾向にある。
- ②鳴雪は古典文学を好み、また滑稽も好む。子規は滑稽嫌いである。

③鳴雪は古代のものの姿や味わいは美であるとし、子規は慎重な態度である。

④鳴雪は「老」に親しみを持ち、子規は「老」が嫌いである。

鳴雪の日本古典や漢学の教養の深さは、子規たちにとって重要な存在といえる。

第3部では、子規没後の鳴雪の俳句活動を青年向け雑誌「文庫」、俳誌「俳諧草紙」、俳誌「南柯」からみてゆく。

「文庫」俳句欄の選者は当初は虚子や石井露月などが担当していたが、鳴雪が担当するようになって俳句欄に変化がみられる。その変化を分析しながら、鳴雪の俳句評や俳句観を検討する。鳴雪がはじめて雑誌の選者となったのがこの「文庫」なのである。

そもそも鳴雪と青年との関わりは深い。明治3年に松山藩権少参事学校掛となった鳴雪は明教館の学則改革をして洋学を加えたり、明治5年には石鉄県学区取締となって小学校の創設に尽力したり、また明治8年には師範学校の創設にも当たる、というように青少年の教育に多く携わっている。その後、明治13年に鳴雪は文部省へ転任して上京している。この文部省でも教育令の改正や規則の制定などに従事し、常に教育畑に身を投じていたといえるだろう。さらに、明治24年に文部省を退官して常磐会寄宿舎監督を主務としたのであるが、この監督もいかなれば旧松山藩子弟の教育監督業務である。

多くの青少年が「文庫」に投書し、また、投書家を中心となって結成された誌友会「松風会」の存在などの背景には、およそ次の3つの理由が考えられる。

1つ目は、鳴雪も深く係わってきた学校制度・教育の普及により青少年読者層の拡大及び自己表現の場の希求。2つ目は、新聞や雑誌の発行が容易になった印刷技術の向上。3つめは、近代化された郵便制度や交通機関の拡充。このような状況の中に於いて、鳴雪は青少年の要求に力を尽くしていたといえるだろう。

鳴雪は「ホトトギス」を筆頭に多くの俳誌に関わってきた。中でも明治39年5月、渡辺水巴によって創刊された「俳諧草紙」は鳴雪の俳句や俳話が多く掲載されていて、鳴雪の大きな活躍の場の一つであったことがわかる。

しかし、明治42年11月に「文庫」に合併すると、その後間もない、明治43年8月に「文庫」は終刊となってしまふ。「文庫」は「青年之友」と改題して再出発したが、鳴雪は「青年之友」と袂を分かち、「文庫俳壇」を俳誌「千代田」へ移すのである。